

東日本視察交流記（14）

6月14日（火） （その2）有朋自遠方来、不亦樂乎

帰路につくために仙台駅に向かった。

「4日間で600km走りましたよ」と佐々木さん。「すごい距離ですね。おかげでいろいろな人と出会えました」と私。「わざわざ関西から大学の先生が来てくれた、と皆さんも喜んでいましたよ。」

論語に「有朋自遠方来、不亦樂乎」という一節がある。ふつう、「朋（とも）あり遠方より来る、また楽しからずや」と訓（よ）んで、「友達が遠くから自分に会いに来てくれる、なんと嬉しいことではないか」という訳をあてる。しかし、私の学生時代、中国哲学史の重沢俊郎先生は異なる解釈を示した。「朋の遠方より来る有り、また楽しからずや」と訓み、「志を同じくする人（＝朋）が遠方から会いに来て



くれる、なんと嬉しいことではないか」と訳す。つまり、友達であったわけではないが、志を同じくする人がいてわざわざ遠方から訪ねてきてくれた、ということになるのである。「ふ～ん」と思いながら、中国古代の思想家たちの交流のありさまを思い浮かべていた。

だが今回のことを振り返ると、重沢流の解釈はまさに我々のことにあてはまるのである。佐々木さんとは友達であったわけではなく、ただ「被災農業者の営農再建のために耕作放棄地を役立てよう」という「志」一点で会いに行ったのである。二人にとって、「そんなことを考えている人がもう一人いたのか」という驚きをもちながら、遠方から来てくれて（行って）会えたことは「なんと嬉しいことではないか」ということなのである。

そういえば、今回の旅は、思ったほど疲れなかった。東北の方々のあったかい気持ちに迎えられ、また被災農家の方も真情を語ってくれたからであろう。

ひょっとして、我々二人の間の「有朋」というのが、会う人と我々の間にも共有されていたのかもしれない。

佐々木さんと私は、今後の活動について意見を交わした。

一つは、おいしい、数種類のお米をセットした「お米プロジェクト」を進める。

二つは、10a単位の広さのある、あの耕作放棄地で再生プロジェクトを進める。有機肥料の使用などもそこで試みる。

三つは、被災農業者との連携をつくって、第一のプロジェクトでは「復興資金」をセットにすることの可能性を追求する、第二のプロジェクトには被災農業者自身に参加してもらうようにする。

四つは、「東日本大震災・農業漁業復興共同体」と連絡を取りながら、お手伝いできることをする。

これらの点を確認しながら、仙台駅で別れることになった。「先生、今回お会いした人たちがつくったお米を送ります。こちらでの活動はしこしこやっていますから、ご安心を」、「ありがとう、お米楽しみにしています。それではよろしく」と言い、再会を約した。

お土産に笹かまぼことずんだ餅を買って、夕方の新幹線で帰路に着いた。

(14日、終り)